



米田 美咲 (よねた みさき) 第一中 2年生

作品名: 生きると死ぬ

図 書: 終末のフール

今日という日について考える。自分は今日一日悔いのないように生きられたらどうか。今日という日に満足しているだろうか。あなたは今日一日を有意義に過ごせただろうか。普段は考えないようなことを「終末のフール」を読んで考え出した。今日一日を考えることは簡単かもしれない。次は人生について考える。人生については楽しかったらどうか、満足だったらどうか、と考えるのはあまりにも早過ぎる。だからこれから、一度きりしかない自分自身の人生をどう生きるか、考えていく。

「終末のフール」は、地球があと三年の猶予となったとき、それぞれ人間は何をするのか、という物語である。残り三年となると、「死ぬまでに何かやろうと。」という気持ちと、「新しいことを始めても、三年からその先は無いのだ。」という気持ちが出てくる。人々は残り三年をいかに幸せに生きるのかを考えるのだ。

まず印象に残ったのは、二話目の太陽のシールという話である。とある夫婦の話で、奥さんが妊娠して子供を産むか産まないか、ということだ。新しい生命への希望というのは喜ぶべきなのだろうけど、残りは三年しか無いのだ。無事産まれたとして、子供は三歳までしか生きることができない。どうなんだろう。産まれた子供はそれで、幸せなのか。三歳の我が子の姿までしか見ることができないとわかりながら、子に希望を持たせて夫婦は育てていくことができるのだろうか。しかし、やはり残り三年の決断は大きい。もし三年後が無事だったら、と未来に小さな希望を持って産むことにしたのだった。

次に私が考えたのは六話目の天体のヨールについてだ。この話は、自殺を考えている男と、その男の大学時代の友人との話だ。この友人は、天体オタクである。まず、三年後にはもう生きていられないとわかっている、最愛の彼女も家族も死んでしまっているという状況で前向きに生きていけるだろうか。そんな状況下では私でも自殺を考えるだろう。一方、天体オタクの友人はこの期に及んでも天体を楽しんでいる。友人の言葉で、「小惑星が落ちてくることになって、僕はこんなにも楽しめる。」とある。男は小惑星によって絶望的になり自殺まで考えているというのに、友人は天体が、星が好きなおかげでこの状況を楽しんでいる。私は、いくら最悪な状況でも好きな事があれば楽しんで生きていけるのだな、と思った。だから友人は、すでに残り三年をどう生きるのが幸せなのかわかっていたのだ。

男は、その天体オタクの友人に最後のあいさつをして、家に戻り、天体観測をし

たあとこの世にさよならを告げた。男にとって幸せだったのかはわからないが、死ぬまで「気が変わる前に。チャンスは逃しちゃいけない。」という男自身の考えをつらぬき通していたから、その男なりに残りの三年を過ごすのだと思った。

二話目の太陽のシールと六話目の天体のヨールを取り上げ、自分の考えを出していったが、二話の夫婦は三年後も未来があると希望を持っていた。六話目の友人は自分の好きな事によって今を楽しんでいた。そして男は、男なりの人生へと進んでいった。この二話から考え出したのは、残りの人生は自分なりの考えを出し、その後の決断によって幸せに生きていけるのだろう、ということだ。それも、自分なりの考えで自分なりの幸せをつかみ取ることができるのでは、と思った。

「生きる」ということを唐突に考えるのは難しい。自分が生きることについて、自分の人生について考え出すと「自分はなんのために生きているのだろう。」とネガティブになりかねない。

ところが、生きることやこれからの人生のことを考えるにあたって、死ぬことを取り入れると、考えやすくなる。

私が考え出した結果は、自分なりの考えで自分なりの幸せをつかむ。そうやってこれからの人生をより良いものにしていく。となったが、他にはどのような考えが出てくるのだろうか。

三年後死ぬとしたら？一ヵ月後死ぬとしたら？明日死ぬとしたら？長い長いこれからの自分の人生に「死」を近づけてみると、今日一日をいかに生きるか、考えやすくなるのではないだろうか。